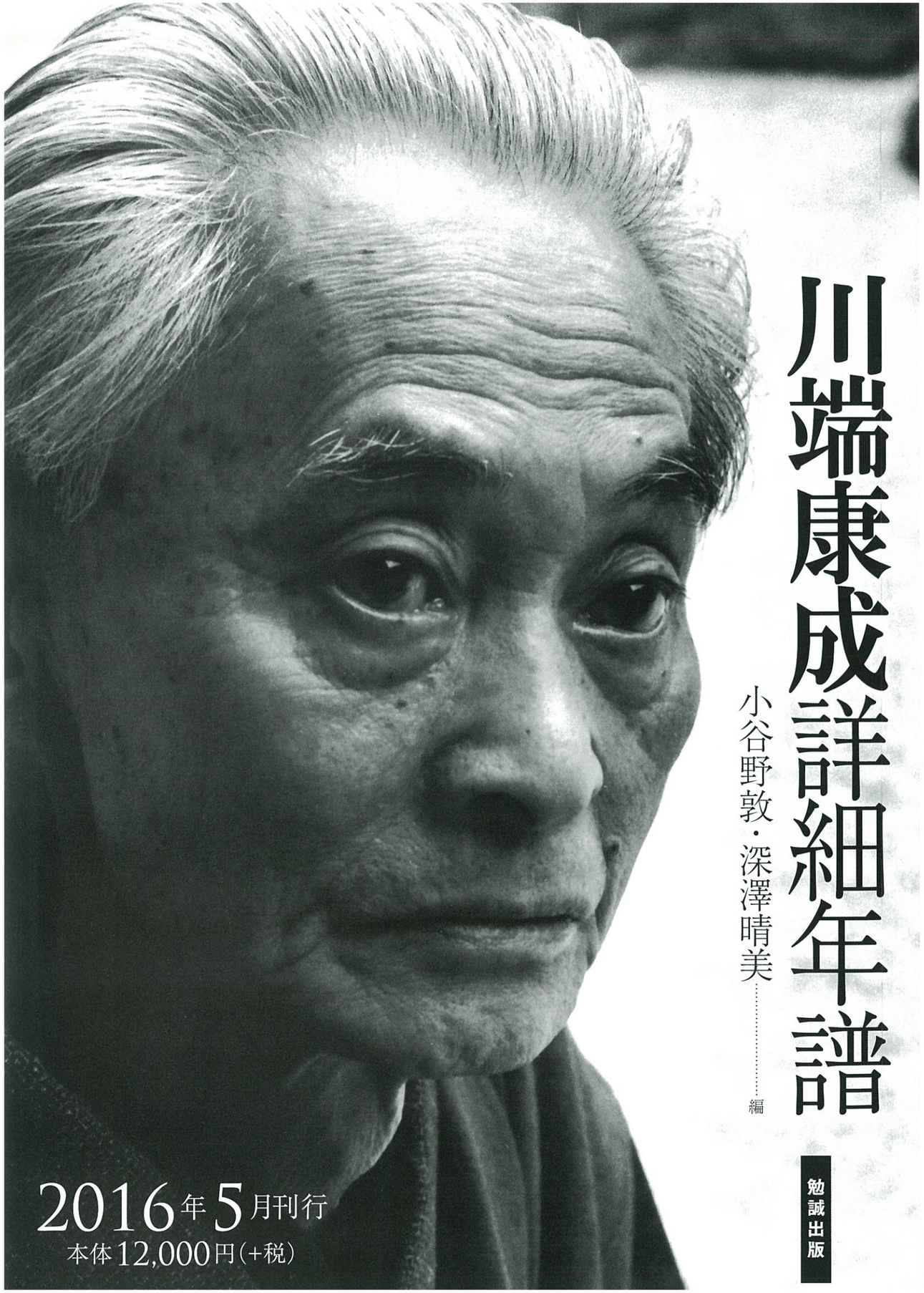


川端康成詳細年譜

小谷野敦・深澤晴美……編

勉誠出版

2016年5月刊行
本体12,000円(+税)

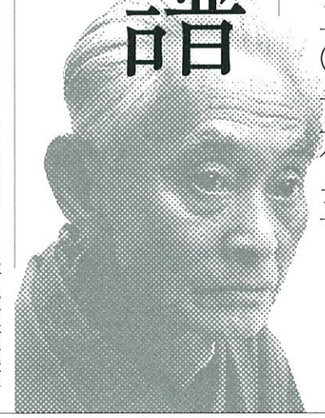
川端康成詳細年譜

小谷野敦・深澤晴美……編

本体一二、〇〇〇円(+税)

A5判上製カバー装・七二〇頁
ISBN978-4-585-29107-7 C1000

二〇一六年五月刊行



図版提供……©林忠彦研究室

川端康成初の本格的な詳細年譜

日本人初のノーベル文学賞作家であり、「昭和最大の文壇政治家」とも称される川端康成。いまなお謎の多いその生涯を明らかにする――

文豪と呼ばれ、国内外において日本を代表する作家である川端は、いまだ全集からもれた文章や、公開されていない資料も多く、その生涯に不明なところが多い。川端の残した作品や公開された日記・書簡をベースに、当時の新聞記事や交友のあった作家らの回顧録などあまたの資料・記録や関係者への取材から、その生活を再現する。

小谷野敦
深澤晴美……編

小谷野敦(こやの・あつし)一九六二年、茨城県水海道市(現・常総市)生まれ。作家・比較文学者。学術博士(超域文化科学、東京大学)。『聖母のいない国』(青土社、二〇〇二年)で、サントリー学芸賞受賞。作家としては、『母子寮前』(文藝春秋、二〇二年)『ヌエのいた家』(同、二〇一五年)が、それぞれ芥川賞候補となる。主な著作に、『江藤淳と大江健三郎』(筑摩書房、二〇一五年)、『川端康成伝――双面の人』(中央公論新社、二〇三年)、『谷崎潤一郎伝――堂々たる人生』(中央公論新社、二〇〇六年)などがある。

深澤晴美(ふかさわ・はるみ)一九六一年、岡山県倉敷市生まれ。川端康成学会常任理事。お茶の水女子大学国文学科卒業、同大学院修士課程修了。和洋九段女子中学校・高等学校教諭。編著『川端康成作品論集成(第五巻)十六歳の日記・名人』(おうふう、二〇一〇年)。『川端文学への視界』(銀の鈴社)に「川端康成研究展望」を連載中。二〇三年には川端の未発表原稿「星を盗んだ父」を発見し、文芸誌『新潮』に掲載、『文学』(岩波書店)・『国文』(お茶の水女子大学)で執筆時期・背景を分析、発表して話題となった。

川端康成詳細年譜
小谷野敦・深澤晴美……編
本体12,000円(+税)
A5判上製カバー装・720頁
2016年4月刊行
ISBN978-4-585-29107-7 C1000
冊

貴店印

ご送付先・備考欄

勉誠出版 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-10-2 TEL=03-5215-9021 FAX=03-5215-9025
E-mail=info@bensei.jp URL=http://bensei.jp/

※ご記入いただいた個人情報は、ご注文書籍の発送、お支払い確認およびご希望いただいた方への刊行案内をお送りするために使用し、その目的以外での使用は致しません。

本書の特徴

◎『川端康成伝』が好評の小谷野敦氏と川端康成学会理事の深澤晴美氏による詳細な年譜。新発掘の資料や事実も多く含む。

◎川端康成研究における重要な基礎資料であるとともに、その交友関係・活動範囲の広さゆえ、日本近代文学のみならず日本近代史研究においても有益な資料となる。

◎川端康成の誕生から死後まで、一年ごとに分類してまとめる。また、誕生以前、没後の記述も加え、生涯だけに留まらない年譜とする。

◎本人の日記・作品や往復書簡などの他、交流のあった人物の日記・回顧録、新聞記事など多方面の記述や関係者への取材を統合することで、生涯を日付付きで整理する。

◎詳細な注を付し、情報の出典はもちろん、川端の交友関係、文壇・社会の様相も知ることができる。

◎巻末には川端への言及がある書籍、雑誌、新聞などの情報を整理し、系図・索引も付し、読者の便宜を図った。

組見本

本書の参照方法

※原寸大

上段には、川端の生涯と彼の関与した歴史的事件を記載した。

下段には詳細な注を付した。情報の出典、川端の交友関係、文壇・社会の様相も知ることができる。

川端康成の生涯を可能なかぎり探索し、詳細に各年別、月日単位で記述する。没後については、ごく重要な関連事項のみ記載した。

記述の典拠については、頻出するもの、無署名のものは番号を振り、川端の作品は「　」または〈　〉で、他は筆者名で（複数ある場合は青野①、青野②のように）示し、巻末に付した。

一一月一三日、光悦会最終日、秀子、大佛夫妻、狩野近雄夫妻、水上勉と四都茶席を回り、嵯峨の大河内山荘（傳次郎）、詩仙堂に。大佛夫妻と別れ、雲月で夕飯、祇園の松八重、遊里香、とみ代と茶屋二軒、名付けのバー百合香、午前二時都ホテル。澤野と一緒か。（東山魁夷）、（茨木市で）。女三人の名前は水上）

一一月一四日、秀子が寝ているので濱作で〈茨木市で〉を書く。『源氏物語』現代語訳を考えて読んでいたが、不要と思うようになる。西川と東おどりの台本打ち合わせのため初めて名神高速道を名古屋へ、秀子と。名古屋で宗達・千羽鶴下絵、光悦書、三十六歌仙巻物を見て驚嘆。(71)東山宛）東山より、お礼。出発前に一度伺いたい。(71)

一一月一五日、「京洛四季」序文を書くため、秀子を置いて京都都ホテルへ戻る。(71)東山宛）

一一月一七日、夜、都ホテルから東山宛速達、明日は序文を終えて持参、帰東できると思う。一九日のペンの会はご迷惑だろうが、明日のスウェーデン大使館のノーベル賞受賞祝賀会の方はご出席を。(71)

一一月一八日、スウェーデン大使館主催の祝賀会。東山も出席か。(71)東山宛）

一一月一九日、ペンクラブ主催の受賞祝賀会。(71)東山宛）

一一月二〇日、古谷綱武『評伝川端康成』（実業之日本社）刊行。

一一月二三日、日本武道館での明治百年記念式典に出席か。午後、新喜楽で東光、三木武夫、井上靖と懇談。(94)

一一月二四日、朝、ホテルの売店でスウェーデン大使の息子夫人にサインを求められ、六本木で車を降りるとドミニカ共和国大使館へ連れて行かれそうになる。（夕日野）

*『毎日新聞』新連載小説には「祇園の女将が舞妓から店を持つまでを描くつもり」、光悦忌の帰りにモデルになる女将を取材してきたと加藤貞雄記者に話す。（加藤貞）ノーベル賞受賞を報じた一〇月一八日朝刊にも、「本紙「現代日本の小説」の執筆メンバー」の小見出しで、近く〝京都を舞台にした作品〟を発表することになっていると報道。

*「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」。宗達が描いた無数の鶴の上に、光悦が三十六歌仙の和歌を記した。京都国立博物館所蔵だが、名古屋に来ていたか。

*『新潮』で往復書簡発表後に、すみ夫人から提供されたもの。次の短歌一首、俳句二句も披露。

「片しぐれ光悦垣のもみぢかな」（一三日）

「秋夕日のただなかにある伊吹山」（一四日）

「晩秋の青蓮院の大楠は若葉の色にひろがりて照る」（一六日、御絵の楠を見に参って）

一一月二一日、石濱金作死去、六九歳。(90)石濱年譜）

*スウェーデン出発前、東京のホテルへ百冊以上の日本文化に関する書物を持ち込んで講演の草稿を考えた。（毎日新聞）

一九七二年（昭和四七）七四歳

一月、〈東山さんの窓〉を『日本美術』に掲載。牧進に推薦文〈牧進讃〉と「春夏秋冬」の大書を渡し、牧進展の名がこれに決定する。（牧①②）

一月一日、金に関する重大案件を二つ済ませる。（新人でいたい）八尾に今東光を訪問。陶画を柳沢棟三郎に包ませる。夜、鎌倉に帰宅。(77)

一月二日、「日本人は変わったか」NHK放送。テロの噂があり、自宅警備で年賀とりやめ。(78)秦野来る。香男里の運転で逗子マリーナに案内。(77)大石逸策が河出書房のHと訪れるが留守、秀子は温泉。（大石）

一月四日、午前中に鎌倉八幡宮。月村麗子、文春の徳田（雅彦）来る。秀子と四人でマリーナへ。五時から九時まで。おせちを食べ、ボーリング場。徳田と同道、ホテルオークラへ。(77)、月村②）七〇四号室泊。（新人でいたい）

一月五日、文藝春秋の創立五〇周年、新年の社員顔合わせで講演。(29)没後『諸君！』六月号に「新人でいたい」（最後の講演）として纏められた。

一月六日、ホテルニューオータニの大都リッチランドの新年会に出席。(77)銀座「アンドリュース」（加藤晴美ママ）に、赤坂から女の子を連れていく。

一月九日、浅草の正木健吉に、江戸末期の浅草寺の絵巻を見つけたと電話。（正木）

一月一〇日、〈夢幻（ゆめまぼろし）の如くなり〉を『文藝春秋』二月号に掲載。

一月一一日、ペンクラブ事務局長に綱淵謙錠（けんじょう）が就任。その後、「日本文化研究国際会議」（一一月一八―二五日）の要項が決定、川端は運営委員会総委員

*一月号は東山魁夷特集号。(27)

*色画用紙一六枚を使用、タイトル下に「四十七年正月」と記されていることが牧①掲載の写真で確認出来る。

*東光夫人によると、運転手付きの車で突然訪問。壁にかかっていた東光の書を染め書きした陶板を所望し、交換に薬焼の茶碗を置いていった。（高比良②）

*草柳②によれば、討論会のテーマは「日本の美を考える。」

*徳田秋聲の四男（一九一五―二〇〇一）。

*秀島豊社長によれば、川端が亡くなったこの年、伊豆韮山の伊豆エメラルド別荘地に工費二千万円で木造二階の別荘の建築注文を受けて既に基礎段階に入っていた。国際ペンクラブの時には外人客を呼ぶんだと非常に気に入って、秀子と現地に見に来ていた。（『神奈川新聞』四月一八日）

*(23)には、前に勤めていたクラブに客で来てから六年来の交際、軽井沢の別荘にも遊びに行き、クラブの名も川端の助言とある。

*綱淵謙錠（一九二四―九六）元中央公論社編集者、直木賞作家。